

さ 30週 胎児はちょうど 1500
 <<妊娠に関する数字>>

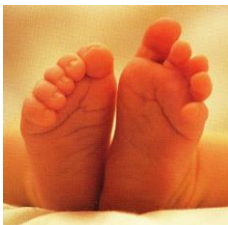
妊娠に関係した数字でいくつか切れのよいものがあります。一押しは「妊娠 30 週での赤ちゃんの体重は 1500g」という数字でしょう。ともに 30 の倍数なので記憶しやすいです。余談ですが、昔高校の地理で、ジャズ発祥の地として有名な米国のニューオーリンズの位置がともに 30 の倍数である北緯 30 度、西経 90 度と習ったことを思い出します。さらに「赤ちゃんは 3 週間で 500g 大きくなる」ことも憶えると、妊娠 33 週で 2000g、妊娠 36 週で 2500g、妊娠 39 週で 3000g とすぐに弾き出せます。なお、30 週から 3 週間戻った妊娠 27 週では 1000g です。妊婦健診で妊娠 33 週の時に 2200g と言われたら「ちょっと大き目だな」と分かります。

人口千人から 1 年間に何人の赤ちゃんが生まれるのかを「出生率」といい(1 人の女性が生涯に何人産むかという「合計特殊出生率」とは異なります)、日本では長いこと「ほぼ 10 人」ときれいな数字でした。世界ではこの 2 倍の出生率で、「世界がもし 100 人の村だったら」という本には、「村で 1 年に 2 人が生まれ 1 人が亡くなるので、翌年には人口が 101 人になります」とあります。もし日本が 100 人の村だったら(人口比より男性 49 人、女性 51 人から成ります)、1 年間に 1 人生まれることとなります。女の子からおばあさんまで含めた 51 人の女性の誰か 1 人が 1 年の間に産出すると考えると、結構女性は赤ちゃんを産んでくださっている気もします。この数字は、産科医院が年間 300 件のお産を目指すなら、3 万人の診療圏を持つ必要がある、などと応用できます。ただし昨今の少子化で平成 25 年の出生率は 8.2 まで低下しています。

そもそも妊娠期間自体が、昔から十月十日(とつきとおか)と言われ、きれいな数字です。ここで十月は“かぞえ”(十か月目)ですので、実際は 9 ヶ月+10 日=280 日です。一方、この「月」は旧暦の月で 1 ヶ月=28 日なので、十月=280 日という説もあります。この場合「十日」がつくのは、特に初産の場合 280 日から 10 日くらい遅れることはよくあるので、焦らないようにという意味だそうです。

赤ちゃんの身長も簡単にきれいな数字です。各妊娠月末の身長はその月数 x 5cm です。例えば妊娠 7 ヶ月末(27 週)では 35cm ですし、生まれる妊娠 10 ヶ月末では 50cm です。

ところで、この身長 50cm の赤ちゃんの足のサイズをご存知でしょうか? 数名の赤ちゃんで実測したところ約 7.5cm でした(赤ちゃんのソックスを縫う場合は参考にしてください)。この 7.5cm は身長 6.6 分の 1 に相当しますが、面白いことに身長 175cm(体重 72kg)、足サイズ 26.5cm の成人と同じ比率です。一方、足の表面積を考えると、この成人の足のサイズは赤ちゃんの 3.5 倍ですので面積は 3.5 の二乗で 12 倍です。成人の体重は 3 キロの赤ちゃんの 24 倍もあるので、足への負担は赤ちゃんの方が半分です。近い将来初めて立つために、これだと都合が良いのかもしれませんが。



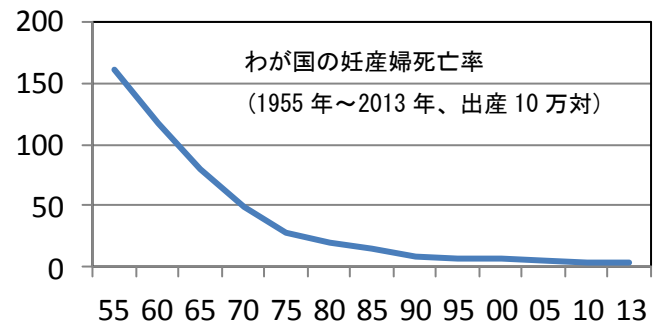
「這えば立て、立てば歩めの親心」と申しますが、子育てにはこのように初めてハイハイした! 立った! 歩いた! といった具合にたくさんの楽しみが待っています。

き 切らずとも赤ちゃんちゃんと生まれます
 <<会陰切開>>

産婦人科医は種々の興味本位の質問を受ける宿命にあります。筆頭は「どうして産婦人科を選んだのですか?」でしょう。内科医がどうして内科を選んだのかと質問されるよりは、圧倒的に頻度が高いと思われます。

次に多い質問が「先生の奥さんのお産は、先生が立ち会ったのですか?」です。昔は、自分の妻のお産は大学病院の上司(准教授、講師など)に頼むのが一般的でしたが、最近の若い先生方は自分でお産をとることが多いようです。私の場合は昔のことで、大学の上司の先生にお願いしたのですが、2 人目の時はこの先生が学会で留守だったので自分で担当しました。生まれる直前に胎児心音が少し低下したため、早く生まれるよう会陰切開をしようとしたら、助産師(実は妻の実母)が「大丈夫だがね、まあ待てて(新潟弁)」と言ったので思い留まり、結局妻は無傷で産産しました。「あなたは私を切ろうとしたが、お母さんが守ってくれた」と今でも言われています。この時から「自分の職業は自分のためには使わない方がいい」と思うようになりました。

お産に医療が介入するようになって、お産の安全性は格段に向上しました。例えば妊産婦死亡率は、1955 年の出産 10 万あたり 161.7 から 2013 年には 3.4 まで減少し、赤ちゃんの死亡率も出生 1000 あたり 43.9 から 4.0 と著しく減少してい



ます。しかし、その一方で医療側の都合を優先した医療技術の濫用が問題となり、過剰な介入に対する反省がなされているのも事実です。その最たるものが、「慣例的に会陰切開を行うこと」で、1996 年に WHO(世界保健機構)から出された勧告でも「不適切な処置」とされています。当院ではなるべく会陰切開は行わないようにしており、初産婦さんでも実施率は 25% 程度です。もっとも残りの 75% の初産婦さんのうち、全く切れない方はほんの一部で、大多数は生じた会陰裂傷を縫合することになります。しかし多くの場合、会陰切開をした場合より自然に切れた裂傷の方が傷は浅い(数箇所に及ぶ場合はありますが)ので、産後は楽だと思います。

こう書くと会陰切開は「悪」で、すぐ切開をする先生は冷たい人みたいな印象を与えるかもしれませんが、しかし、実際はそう単純なものではありません。胎児の心音が相当低下した場合は、早く生まれるよう切開すべきです。またそうでなくても、切開することでお産の最後のきつい段階が短縮されますので、切開の方が優しいという見方もできます。全員に切開を行うのは行き過ぎでしょうが、「何が何でもノー」も賢明ではありません。お産の前に担当の先生と会陰切開についてもう一度よく話し合っておくことをお勧めします。